慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	石川縣史蹟名勝調査報告 第壹輯
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.4 (1923. 11) ,p.133(597)- 134(598)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19231100-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

い。なほ土器中に甑の存在を推察することを得るが、これによつて此の貝塚住民が穀物を蒸煮して食料に供せしこと、從つてすでに農業時代にあつたことを知り、ことに第七層より炭化せる米粒の一塊が發見せられたる興味ある事實はこれを實證するものである。またこの事實は漢代において南鮮民族間に稻を植え、米を食せしことを確證するものであつて、日本朝鮮等における農業時代の開始時期を決定するに重要なるものである。土製品には紡錘車鐵器には鐵斧頭と鐵製刀子の柄部、裝飾品には牙製懸吊物、及び後漢時代の製作を思はるゝ玻璃製棗玉がある。ことに注意すべきは王莽時代の古錢一個の發見であつて、これは內地における諸遺跡とその文化の性質とを比較して絕東における支那文化の波及、金屬時代の諸光の何時に始まれるかを考定するに最も緊要なる資料を提供するものである。其他の諸品には第五層に發見せるものに、尖端炭化せる木棒があつて、これは恐らく發火用木燧に使用したるものであらう。

さて以上の發掘結果によれば、三十尺に上る貝層において遺物の種類は上下において何等の相違を認めず、從つてこの貝層は大體において同一文化時期に構成されたものとみるべきであり、本貝塚の示現せる文化は、一方に僅少ながら石器の使用あり、他方既に金屬器の使用を見るの時期、卽ち金石併用の過渡期に屬するものであつて、その貨泉の存在により此の遺跡の一部が第一世紀もしくは第二世紀頃に構成されたものと推測するを得、また發見遺物の特長によつて、本貝塚住民が後の伊那古墳築成の民族の祖をなすものと認められる。而して南鮮石器時代金石併用期の遺跡は、その文化と人種とにおいて內地彌生式土器系統のそれと密接親緣の關係にあるを推測せしめ、從つて金海貝塚の發掘と調査とは單に朝鮮における先史時代の研究に重要なる寄與をなすのみならず、日本內地のそれを究むるに資すること頗る大であつて、吾々は本調査の關係者に深甚の敬意を表するのである。

（松本芳夫）

石川縣史蹟名勝調査報告　第壹輯（石川縣）

本書は加賀、能登の古代遺跡の調査であつて、石器發見の遺跡と古墳との二編よりなり、前者は刈安及上野遺跡、笹塚及末松遺跡、萬行及大津遺跡、大根布及附近の遺跡、石器時代概觀の五章後者は法皇山の橫穴、月津及分校附近の古墳、御幸塚及附近の橫穴、散田（金谷）及附近の古墳、邑知及志賀郷の古墳、鍋山古墳、德田村附近の古墳、須曾の古墳、諸橋及鵠巢村附近の古墳、岩坂附近の橫穴の十二章、附錄古代製陶所遺趾に分たれ、鮮明なる圖板と實測圖とを多數附してゐる。

加賀、能登は古來高志の一部であるが、比較的早く大和朝廷の文化に侵入し得る地方であり、對岸は文化の早く開けたる鮮滿地方であるから、海岸方面から來る特殊文化の侵入を豫想し得べくこの關係は直ちに裏日本における古代民族の消長を考察する資料である。

本書は、發見と研究とによつて多くの問題をわが古代史に提起

しつゝある活動めざましき昨今の考古學界における尊き收穫の一であつて、古代日本の研究に對して貢獻するところ大なるを思はしめる。かゝる尊き研究報告書が單に本縣のみならず、他府縣においても續々公刊されんことを切望してやまない。

（松本芳夫）

編輯餘錄

今回の大震火災について會員並びに讀者諸君に御見舞申上げます。本誌は丁度印刷中でありましたが、印刷所の類燒のため原稿の大半を燒失し、ために發行の遲延を餘儀なくされました。こゝに筆者及び會員諸君に對して御詫びいたします。燒失した原稿のうち回復を見るを得なかつたものには、移川子之藏氏の「南蠻人種に就いて」、加藤繁氏の「竹頭木宵錄」、書評における故田中萃一郎博士の「愛蘭革命史」、「足利時代史」、松本信廣氏の「山行」、René grouset; Hlstoire de Lasie、恒松安夫氏の The Mckinley and Roosevelt Administration 1897—1909. By James Ford Rhodes 等があります。この中田中博士の二文は本誌における博士の絶筆とも稱すべきものであつて、兩著に對して犀利なる批評を加へられ、頗る興味ある尊き論文でありましたが、これを燒失してしまつたことは博士の靈に對して申譯なきとともに、誠に惜しみてもあまりあるものであります。が幸ひ燒失を免れた論文がありましたから、それを基として直ちに續刊の計畫を立て、こゝに本誌の發刊をみるに至つたのはせめてもの喜びであります。本誌は本來七月に發刊すべきでありましたが、種々の原因で今日まで遲延いたしました。從つて本年は第二卷第四號をもつて最終となし、第三卷第一號は來年一月をもつて發刊することにします。以後これに準じて從前のごとく年四回の發刊としますから御諒恕下さい。本誌も多くの試鍊を經て基礎の强固を加へましたが、年とともに發展して益々わが學界に貢獻せんことを期するために、會員諸君の一層の御助力を切望します。